

# 久生十蘭「地底獣国」の方法

## ——物語の過剰——

井 上 諭 一

### 0. はじめに

最近になってにわかに注目されているとは言え、久生十蘭は未だに謎の面の多い作家であると言わなければならない。この作家の依った雑誌「新青年」についての研究は、鈴木沙那美（貞美）の一連の研究以来、急速に進展したように思われるが、久生十蘭の諸作品自体についての研究は、まだまったく不十分なものである。本論では、比較的初期の作品たる「地底獣国」（昭和十四年八月〜九月。「新青年」）に焦点をあて、その方法的特殊性を明かすと共に、この作品を再評価する視点を獲得することを目指す。

むろん、十蘭を論じる時、「新青年」という雑誌についての考察を捨象し去ることはむづかしい。特に、水谷準、谷譲次との関係は重要であろう。この三人で、「新青年」の、いわば「函館枢軸」をかたちづくることになるからである。<sup>注3</sup> また、既に早く荒正人が指摘しさらに中野美代子が論じたように、小栗虫太郎との緊張関係の下で「地底獣国」が書かれていることは明らかであり、「新青年」における「魔境もの」という動因を考えないわけにはゆかない。しかし、本論では主に作品それ自体に論点を絞り込み、この奇妙な小説が何故読まれ得るのか、その推進力を作品中に探すという読みの一レベルを提示したいと考える。

「地底獣国」の虚実とりまぜた膨大な情報量は、すべての細部にわたっての

注釈作業をほとんど不可能と思わしめるほどである。もちろんその「注釈」は論者の手に余るが、仮にそれを実行したとすると莫大な時間と誌面を必要とすることになる。本論では、それは必要とする最小限にとどめざるを得ない。

### 1. 語り口の問題

「地底獣国」は、まず、きわめて事務的な一文をもって始まる。

モスクワの科学翰林院は、第二次五カ年計画期間中における文化的国家事業として、三つの企画をあげ、国民教育省および国家計画委員会を通じて中央委員会に提出し、第八回連邦ソヴィエト大会で承認された。<sup>注6</sup>（P. 45）

この、あくまで実務的に簡素な、ほとんど政党あるいは官僚の公式報告を思わせる一文で始まった小説は、ところが、そのわずか三ページほど後で、早くも劇的な変化を遂げてしまうのである。

「北緯六十二度卅分における調査報告」とは、いったい、どんなものであったろう。その秘密は、永遠の時間の中へ完全に埋没してしまうはずであったが、はからざる機縁によって、驚異すべき調査の主題と、その蔭にひ

そむ人智に絶した秘境の実相が、さる同朋の口から曝露されたのである。

(P. 46)

ここで「同朋」と呼ばれているのは、すぐ後に続く文章では「邦人」とされる「葦栄二郎」「清水岩吉以下六名」のことであるが、この引用部分によって、この小説の語り手が（少なくともここでは）「日本人」の属性を与えられ、かつ、ある種浪漫的とも言うべき性質を帯びていることが明らかにになる。もちろん、この大仰な語り口を十蘭の個人的文体と捉える根拠は何もない。ここでは第一に昭和十四年八月の「新青年」というフィードの影響をむしろ考えるべきであろう。しかし、問題はそこにだけあるのではない。強力きわまりない偏向を持たされつつ浮かびあがってくる語り手の創出という点に注目すべきであろう。この語り手は、否応もなく読み手に意識されることになる。「公式見解」文体的冒頭表現の直後には、この語り手の顕在性は余りにも明らかになるのであるからだ。

これに続く「一、苔原とRadio」の冒頭は、一見事務的でありつつ、その実感傷的な、そう言うことが許されるなら典型的な「大衆小説」の文章であると言えよう。

黄昏。北緯62°30'の長いながい黄昏。太陽が、夕方から次の朝まで、光のない黄銅色を持ち越す。(P. 47)

この思い入れ、このたつぷりとした涙ぐみ方を、しかし、単純に十蘭個人あるいはジャンルに帰着させてはならない。小説冒頭の官僚作文風の文章から読み進んでくれば、ここはプロログ末尾の顕在的な語り手と同定されるはずであり、偏向した語り口が維持されている証しと捉えられよう。やがて、この語り手はさらに姿を露にし、神より他に知られないはずの事実を暴き出してゆく。「婦人速記者」ナターシャ・イワーノヴナに関わる記述、あるいは日本人流刑

囚に対する描写等、いずれも強い偏向を持ったものであり、「六、『フルジュヌ・スーザン』の河」に入る以前まで、この文体が基調ををなしていることは明らかである。

もつとも、「二、地球の抜け穴」では、この語り手は「熔岩隧道」の説明と古文書（架空の）の紹介に専らしている、ここに限っては顕在性が薄い。しかしながら「一」から「五」までは、全体としては偏向した語り手を執拗に形成維持している過程と見られよう。

ところが、この語り手の文脈は、ある地点でまったく唐突に失われてしまう。それはつまり「六、『フルジュヌ・スーザン』の河」に入ってから、北緯六十二度廿一分、東経百四十度226m.t.」を告げる事務的な五行——むろん、おそらくは「報告書」からの引用——の後のことで、記述は「手記」にすりかわってしまうのである。

#### 第六日（六月廿日）

可能的限界に於て、海底ならば、どれほど深く沈んでも、皮膚が太陽の微光を受けることが出来る。

直前の五行との関係を考えれば、これが「ヤロスラフスキー博士の手記」の態であることは直ちに読者に了解され得るであろう。また、「手記」の文章それ自体が生硬な学者風（あるいは翻訳文風）であることから、これが「ヤロスラフスキー手記」であることは知られ得る。しかし、それにしてもこれはあまりに急速な展開ではないか。そこには、何の予兆もなかったのである。

この小説において、このような語り手の交替は一回限りのものではない。つまり、さらに読み進んで「七、千万年前の沼」に至ると、今度は急反転して「一」〜「五」の語り手にとび戻るのである。この場合には、語り手（語り口）の交替は見失われかねない。何の指標もないことはもちろんだが、「七」冒頭の文章が文体としては曖昧で、どちらの語り口のものなのか判断しにくいからである。もつとも、二行ほど後には、行頭の一文字の位置が前出の「手記」とはちがい

一文字分高くなっている（つまり、段落頭初ではなく、「手記」は全文一字下げになっていたから。）という一点によって読み手が気づく可能性はある。

しかし、以上の事だけならば、その手法はまだ平凡の領域に留まると言えよう。この、語り手を急速交替させる手法は、同時代の太宰治を持ち出すまでもなく、例えばこれより十年以上前に芥川龍之介が実現した方法の延長線上にあると考えられるからである。十蘭の「地底獣国」が方法的にそれらより複雑であり画期的であるゆえんは、如上の急速交替が未だ単なる一伏線に過ぎないという所にある。そのことは、「九」の冒頭——「地底の海」に至って明らかとなる。「九」の冒頭は、こうである。

断崖の下には、大海の波が押しかえし、巻きかえし、四時止むときなく轟くような音を立てている。海から上った灰色の霧が、屍衣のようにぼんやりと岩角へ纏いつき、あらゆる鋭角を曖昧にし、不気味な島のようにすくいっそうミスチックなものにする。

周囲、十露里。断崖絶壁。（以上略）（P.81）

これはどう見ても、「一、苔原とRadio」のセンチメンタルな文体とおぼしい。ところが、わずか数行後に読者は次のような文章に出会うことになる。

あの時七人だった一行は、今は、たった四人になってしまった。私（モロゾフ教授）それから、三人の漁夫、（以下略）（傍点は引用者。P.82）

つまり、この「九」の文章は「モロゾフ教授」の文章、いわば「モロゾフ手記」であったのである。「八」から「九」へかけての、語り手の速やかな交替——しかし今回のそれは、先の「六」から「七」へかけての交替などに比較しても、さらに極端であると言わなければならない。前回は「報告書」を思わせる文章が数行あって、それが語り手の交替の可能性を示すし、し、になってい

たが、今回は交替を示すし、しは、まったくない。それどころか、先に「九」冒頭を引用して示したように、この語り手は「一」の語り手であるかのようにさえ、文体では暗示されているのである。どれほど注意深い読者であっても、「九」冒頭の語り手をモロゾフ教授であると考えつつ（つまり「九」は「モロゾフ手記」であると考えつつ）読み進むことはあり得ない。従って、「私（モロゾフ教授）」という一句は読者にとって完全に衝撃的であると言える。さて、この「モロゾフ手記」は次第に感傷の度を強めてゆき、ついに「（九月十日記）」をもって終わる。

希望のない生活が続く。死が徐々にやってくる。ああ、太陽！まもなく、われわれはあのようなつかしい光も見ずに、深海の盲目魚のように、死ぬ。（九月十日記）（P.82）

読者にとつてこの読書過程における最大の問題は、この物語始発の段階以来、常にネガティブに（ナターシャは肯定的に捉えたかもしれないが、それを説明する語り手の口調は明らかに否定的。）描写されてきたモロゾフ教授の手記が、どの程度信頼できるものであるのか、という点だ。「地底の海」で、死を前にして、公表のつもりもなく書かれたもの（と見える）であるから、すべてを「真実の告白」と捉える見方には根拠がある。ところが、これを「真実」と捉えると、これに続く手紙文（「ニコライ・ラザレフ教授宛」との整合性が新たな問題として現われて来る。この「手紙」では、（これはモロゾフ教授の筆と考えるしかない）「報告書」に書かなかった「事実」を伝える、と書かれている。つまり、地底の海と思っていたものが実は地上のオホーツク海であったこと、島は既に地籍台帳にも記載されているものであること、など直前の「モロゾフ手記」に書かれてあった事ごとをほとんど完全に覆す「事実」が記されているのである。

この真偽性の問題については次章以下で詳しく検討することにして、ここで

は、この作品全体の語り口についてまとめて確認しておきたい。それは極めて安定的に始まり、数度にわたる明示的あるいは暗示的な急速交替を経て予想もされなかった者の語りで終わるという語り口である。重要なことは、この不統一な語りの下でも（だからこそ、と言うべきなのだが、後述。）少なくとも末尾に至るまでは、読者がこの小説を読み続け得る、ということである。語り手の変遷による衝撃力は、むしろ読書行為の推進力として機能し、限界を越えない限り、行為を阻害することはない。これは一般的にそう言えるが、この作品「地底国」についてもそう言える。各種の評語が読み続けることの不可能に言及しないことが、その傍証となろう。

## 2. 真偽の問題

先述したように、「モローゾフ手記」と「手紙」の内容は大きく異なっている。時間的経過——つまり「モローゾフ手記」の後に「手紙」が書かれた、という順序——を考えに入れても両者は包含する内容が違っており、いわば排反的であって、一方が真実であるとするなら一方は起こり得ない。

仮に、「手紙」のすべてが真実であると仮定してみる。この場合、まず次の一節が問題になる。

訣別にあたり、報告書には記載しなかったちよつとした隠れた事実をお伝えして、渝らざるあなたの友情への感謝のしるしにしたいと思うのです。

(P. 83)

いったい「記載しなかった事実」とは何か。「地底の道」が「千島列島の北端」に抜けていることは報告書に記載されているはずである。でなければ、この小説冒頭にあるようにこの報告書が「危険書類書庫」に収められてしまうことは起こりようもないからである。また、どんな内容の報告書にせよ、報告書が存

在して日本経由でロシア本国に届けられる以上、「抜け穴」が日本領土へ貫通していることは明らかであるから、これを隠すことは不可能である。結局、「報告書に記載しなかったこと」というのは「地底の海」がオホーツク海であり、タラも貝も古生物ではなくありふれたものに過ぎなかったという「悲喜劇」を除けば、「博士（ヤロスラフスキー博士。論者注。）の墜死の真の原因」以外には、あり得ないであろう。

では、「墜死の真の原因」とは何か。この「手紙」に先立つ「モローゾフ手記」においては、博士がプレウロトマリアを求めて断崖に行き「それっきり帰ってこなかった。」とされている。無論、このことが「報告書」に記載されていないとすれば、これを指して「真の原因」の内実であると考えてもよいわけであるが、しかし、これを「報告書」に記載しない理由は、いかなる意味においても発見しえないのではないだろうか。「手紙」中では、「学究としての連帯心」によって「真の原因」を伏せる、という意味のことが書かれている。古生物への興味のあまり墜死した、というのは研究者にとつて名譽にこそなれ、連帯心によって伏せられるべき不名誉にはならないであろう。なおまた、「真の原因」と言うからには、墜死それ自体は確かにあったと考えざるを得ない。したがって、プレウロトマリアを追いつめての墜死、という内容（つまり「モローゾフ手記」の記述内容と同一内容）は「報告書」に記載されていた、と考える他ない。

ということは、プレウロトマリアを原因としない墜死があった、ということになり、これが「真の原因」だと言うことになる。つまりは「モローゾフ手記」の当該部分は真実を語っていないということである。それではいったい真の原因とは何であつたのか、という事が次の問題になる。しかし、作中の記述からそれを完全に論理的に導き出すことができるわけではない。もつとも合理的な可能性としては、ヤロスラフスキー博士の投身自殺ということが考えられるだろう。「希望のない生活」にたえかねての自殺、となれば友情あるいは連帯心から「原因」を記載しない、という場合は十分に考えられる。

とはいえ、如上の考察では「手紙」の記載（中の一部）が真実と前提されて

いる。同じモローゾフ教授の手になる「手記」と「手紙」は前述のように排反的な関係にあり、どちらかあるいは両方が共に偽であると考えねばならない。

モローゾフ教授については、読者が一般に良好なイメージを得るようには、この小説は書かれてこなかった。したがって「手記」の「私」がモローゾフ教授であると知った瞬間から、必然的にその記述内容について読者は疑念を抱きつつ読み進む。「手紙」に至って「真の原因」云々が記されるが、そこで、先述したようなプロセスをたどる読者がいるとすれば、最終的にはその読者はほとんど自動的に「手記」「手紙」の両者について疑い、真偽を分別しようとするであろう。

しかし、真偽を分別するに足る指標は作品内に見出し得ない。ここで読者は一つの決定的な読みの可能性に行き着かざるを得ない。モローゾフ手記「も」手紙「も」、そのすべて（少くとも大部分）が偽りなのではないか？

この点について、本文は表面的には何も語らない。整合的に解決しようとする読者は、したがって、あり得べき事実を想像することを余儀なくされる。むしろ可能性としては無限にも考えられるわけだが、最も整合性のある解釈の一例としては次のようなことが考えられるだろう。

「地底の道」は、実は、南樺太、恵須取山の旧火口へ、抜けている。（千島列島の北端ではなく。）生き残ったモローゾフ教授は、それをソヴィエト・ロシアには隠蔽することとし、同じく生き残った三人の日本人漁夫たちとは「取引」をして、いわば口裏を合わせた。この場合、三人の日本人漁師たちにとって、この密約による利益は、おそらく日本の国防上の利益のみである。つまり地底トンネルを通ってのソヴィエト軍の日本領土内への侵入（侵略）を阻止することである。一方、モローゾフ教授側の利益は、肅清吹きあれるソヴィエトを逃れて、安全な地へと亡命することにあつたと考えられる。「手紙」の末尾近くでは、このように書かれている。

私は？……私は、「地底獣国」の調査の正確を期するために、もう一度地

底道を通じて、スタノヴォイへ帰るつもりなのです。食糧も充分ではなく、壊血病にもかかっているのです、多分、私は途中で倒れるでしょう。（P. 84）

むろん、彼（モローゾフ教授）は、地底道へなど戻らなかった。彼は自己の存在の痕跡を地底道の中に解消し、悠然と（日本領土系由で）亡命を果たしたのである。

こう考えることは、多くの温健な読者にとってはアナキーとの印象を与えるであろう。しかし、実は、このように読んでではじめて了解可能になる事柄が多いのである。第一、仮に地底道がエストル山に通じていない（「手紙」の記載通りだ）とするなら、この物語冒頭でヤロスラフスキー博士が地底道の存在を推定するに至った出来事、つまりエストル山付近には生息しないはずのシベリア獐シベリヤがその付近に出現し、かつ火口へ飛びこんで姿を消す、ということとは、どうして起こり得るであろうか。<sup>注10</sup><sup>注11</sup>

また、「地底の海」が実はオホーツク海であった。などということが現実的にあり得るだろうか。八月、九月のオホーツク海は確かに悪天候かもしれないが、それにしても二月程の間、一度の陽光も見えない（当然、ただの一度でも太陽の影を見れば、そこは地底ではないことになる。）ということはないであろう。もっとも、これには地底における光源という問題もかわってくる。これについては次章で述べる。

このように読んでみれば、この「地底獣国」は、例えばかつて中野美代子が言った意味以上に軍事的、権力闘争的物語であると言え、およそ（地底）冒険小説の一般的枠組からは遠いものになってしまうのである。その意味では確かに、同じ「新青年」に拠つて、十蘭と雁行しつつ「人外魔境」を書いた小栗虫太郎に対する強力なアンチ・テーゼになっていると言ふことができる。

## 3. 物語内の矛盾

前章では、いわば推理小説を読むように、特に小説末尾近くの大きな不整合について述べた。論者は、この小説がこのようにのみ、いわば教条的に読まれていると考えているわけではなく、そのことは後の章で明らかにするが、この章では尚すこし平面的で貧困な論理矛盾について語らなければならない。

まず、地底の明かり、光源について考える。「六、『嘆きの河』<sup>フレイヒス・アーヒス</sup>は前述したようにヤロスラフスキー博士の手記という体裁をとっているが、その「第七日」(六月廿六日)の項に次のような記述がある。

一軒ほど進むと、われわれの行く途に、なんともつかぬぼんやりとした微光が漂っているのを認めた。月光のような蒼白さではなく、霧のような乳白色でもない。(中略)事実、それは現世の感覚を超越した、浄土<sup>パラダイ</sup>の寂光ともいえるような瞑想的な感じを持っていた。(P.68)

さらに進んで、同日の記載中に次のような描写がある。

あたりは、しんと静まりかえり、なんとも名状しがたい透明な淡緑の微光が、月の世界のような草一本、苔ひとつない冷涼たる風景の中を満たしていた。(P.68) (傍点は引用者。)

この「微光」とは一体何なのか、光源は何なのか、物理現象ならばどのような作用によるのか、一切小説内ではあかさされない。この光は地底のどこにでもあるわけではなく、「安全燈」のあかりを頼りにする場面もある。これだけでもいぶかしいことなのだが、「七、千万年前の沼」に至ると事情はさらにわからないものになってゆくのである。

そのうちに、追々天井が低くなつてきて、流れが大きくカーヴしたと思うと、行く途に、ぼんやりと明るく、洞口が見え出してきた。(中略)

捕捉しがたい乳白色が、漠々と沼の上を蔽っていた。地上の空ではない。地底の国の模糊たる天蓋。想像を超えた、高い高い地殻の裏側が、ここで、曇日のような曖昧な空をつくっているのだった。(P.71) (傍点は引用者。)

作者自身すら「地底の明かり」という問題を忘れてしまったかのような記述である。この地底の大空洞を照らす明かりは(先の「微光」とは違うようだが)どこから来て、そのエネルギー源は何なのだろうか。たとえば生物発光(ひかりごけの類)では到底、まかないきれないであろう。この問題は、考えようによつては、これ一つだけで物語を破壊しかねない。大空洞を見わたすに足る明かりがあるかないかはストーリー全体にかかわる。が、この小説内に「十蘭らしからぬ記述の誤り」<sup>注13</sup>を幾つか指摘する中野美代子も、この点については言及していない。実際、明らかな欠陥であるにもかかわらず、それが読書行為を妨げることはなく、場合によつては気付かれないことさえあるであろう。

なぜそのようなことになるのか。おそらく、「地底探険」に際しては神秘的な明かりがあるものだという先入感が我々読者にあるからである。言い換えれば、前テクストなしには「地底獣国」のこの部分は読めない。その前テクストの、一つの、そして決定的な例として、ジュール・ヴェルヌの文章を掲げる。久生十蘭も無論これを意識しつつ書いたであろうし、<sup>注14</sup>読者の多くも「地底獣国」という標題を見た瞬間にヴェルヌの当該作を想起するであろう。

わたしの目がこの海のはるか遠くまでみわたせたのは、特殊な光がこまかい点までも照らしていたからである。それはすばらしくきらめき、輝く太陽の光の束でもなければ、熱のない反射にすぎない月の青白くぼんやりした光でもなかった。ちがうのだ。その光の明るさ、光のゆらめくような散りかたと明るく乾いた白さ、温度の低さ、月のよりも強い光などから考

えて、どうやら電氣性のものであることは明らかだった。(中略)電氣の波は、非常に高いところにある雲に驚くべき光の効果をあたえていた。下のほうにある雲の渦巻には、生き生きとした影がうつり、ときどき雲のあいだから、きわだって強い光線がわたしたちのところまで射しこんでいた。<sup>注15</sup>

ここでは(物理的説明は怪しげながら)かなり明確に説明されている。このような前テクストあるゆえんに、平面論理的には欠陥のある十蘭の表記が、読書行為の場においては破綻を招かずに、むしろ豊かにテクストが読まれるのである。

以上の点の他にも、この物語中に小さな不整合は多く発見される。地質学的年代の誤まり、方角のミス等については既に指摘があるので触れず、それ以外のものについて以下、簡単に述べる。第一は、「亀裂」<sup>クレック</sup>についてである。

ところが、また困ったことが起きた。命の網とたのむ岩の橋に大きな亀裂が入って空中で断ち切れていることだった。(中略)彼は橋の突端に立ち上ると、ひと跳躍で向こうの鞍部へ飛び、その岩に獅噛みついた。その途端、あつてなく岩が揺ぎだした。アツという間もなかった。

(P. 69)

この跳躍失敗の後、他の人々はいったいどうやって亀裂を越えてゆくことができたのだろうか。『ヤロスラフスキー手記』の「第二十二日」に記される「あの戦慄すべき放れ業」に関係があるのかもしれないが、日数が離れすぎている。次に、唯一の女性登場人物たるナターシャ・イワノヴナについて見る。

秘密調査隊のただ一人の女性、婦人速記者。(中略)深い黒い眼。フン族の系統、さもなくば日本人の直情をあらわす切れの長い、大きな眼である。

(P. 47-48) (傍点は引用者。)

「日露の混血児」である彼女に対して「日本人」云々は困難な表現であろう。国籍はソ連のはずである。また、この女性が日本人を見る目は、作品中のロシア人に一致する。作品冒頭では「日本人」に対して嫌悪感を持っていることが描かれている。

モローゾフ教授の丁寧な言葉使いが、ナターシャを苛立てる。こんな獣類たちにあんな廻りくどいことをいつて聞かせている。(P. 56) (傍点は引用者。)

ところが後の『モローゾフ手記』においては、一転してこのように書かれているのである。

彼女は、六人の漁夫の生命を庇護し、私の殺戮から救うためにやって来た。日本人だった彼女の母の血に対する敬意と郷愁。(中略)ところで、この優秀な婦人青年隊士は、ソヴィエトではなく、日本の土の下で眠ることを欲した。母の土の下で。(P. 82)

『モローゾフ手記』のこの条りを信ずるとすれば、ナターシャを統一的な人格として理解することは、かなりむづかしい。むしろ、「血」に対するアンビヴァレントな心情を読みとることは不可能ではないが、ここでは少くとも人格を統一的に描き出す努力は、なされていないと言わなければならない。もともと、前章に述べたようなモローゾフ教授の「亡命」などが想定されるとすれば、この条はモローゾフ教授がナターシャを亡命先へ連れて行くための偽記とも読めるわけである。この場合、もちろんナターシャは「壊血病で死んでしまった」りしないのである。

次に、「日本人」の人数について一言する。「プロローグ」によれば七人の「邦

人」が秘境から生還したかのようなのであるが、「モローゾフ手記」では既に三人に減っている。「手紙」にも「三人の漁夫」とある。

以上の如き、大小の矛盾点は、どれひとつをとっても小説の表面的論理構成から言えば瑕疵であると言わねばならない。なぜこのようなことが可能であるのか、章を改めて論じたい。

#### 4. 物語の過剰へ

前章までに述べたような「瑕疵」は、それらが積み重なった場合には、小説のストーリー的成立さえ危くなるようなものである。にもかかわらず、ほとんどすべての読者がこの小説を読み終えることができ、かなりの読者が賛辞を惜しまないのは何故か。

一つの理由は直ちに挙げることができる。先述の如き前テクストが、がんじがらめなまでに読者の読みを補強、束縛しているからということである。「地底探険」の主題——それは前テクストが生み出したものだが——が与える衝撃力は本来的に大きく、この主題が表現を、いわば主語的にくくってしまう。これゆえに相当程度の論理矛盾も見すごされてしまう可能性があるとと言えるだろう。

しかし、さらに大きな原因が、この小説の読み方それ自体にかかわって存在していると考えられる。つまり、この小説において、内部の論理的統一性、整合感などは読者の誰も欲しない仕組みになっているということである。

この論文の第一章で、論者は、語り手の急速で目まぐるしく、極めて判別しにくい交替について述べた。これによって、各部の人称構造は曖昧となり、語る意識の性格は判別しがたくなってゆく。先述したように、この小説においては語り手の偏向が書きこまれており、しかも各部の語り口は全体を通して一つのトーンには決して収束しない。この結果として、多種類の語り口がほぼ同じ程度の信用度で連続し、相互に肯定、否定を繰り返すという図式が、物語内の

論理と語り口の二つのレベルにおいて同時に成立する。

笠井潔は、十蘭の昭和十二年の作品「黒い手帳」について、次のように言う。

構成は単純だが、この作品には最後になっても解き明されることのない謎がはらまれている。あるいはむしろ、この作品全体が一箇の謎であるともいうる。(中略) つまりこの作品は、「黒い手帳」というシンボルを巡って、芸術家小説から探偵小説へ、物語から物語の自壊へと転移していくのだ。「黒い手帳」のシンボルとはいわば、この物語の内容にセットされた一箇の自壊装置に他ならないのである。<sup>注17)</sup>

この評語は「黒い手帳」に対してもっともなものだが、しかし、昭和十四年の「地底獣国」こそ、質量ともにこの言方にふさわしいものであろう。「黒い手帳」では記述内容によってのみ成立する謎(あるいは物語の自壊)が、「地底獣国」では人称構造のレベルから成立しているのである。笠井にならって言えば、「地底獣国」とは冒険小説(軍事小説)から探偵小説へ、と「転移」する物語なのである。

このように読むことにおいてのみ、末尾の「モローゾフ手記」と「手紙」は読まれ得る。より正確に言えば、論理的に完全には読み解かれ得ず、そうであることによって小説を読むための機能を果たす、ということである。論者は前章までに、いささか奇矯にも見られる読み方を提示してみたが、そのような多種の物語を読み手において生産する機能が、先述したような物語構造自体にあるというのが、この小説の特徴である。これはもはや、通常の意味で物語とは言えない。また、ここで確かに物語は「自壊」していくが、それは単純に自壊するのではなく、次々と別の物語(あるいは物語の可能性)を生成し続ける。であるからこそ、前章までに述べたような読み方が要請されるのである。むしろここでは、物語の過剰の物語と呼ぶべきであろう。

かつて荒正人は、この小説を単線的に読み、末尾の「手紙」を「アンティ・



クライマックス」とした。<sup>注18</sup>また、草森紳一は、さらに単純化して末尾を「十蘭得意の大逆転のはずし」とし、「手紙」を全面的に信用して「久生十蘭は、すべてを善人に戻してしまっている。」と見ている。<sup>注19</sup>既に明らかであると思うが、これらは、「地底獣国」の複雑な人称構造に不注意であり、いわゆる古典的な「結末の専制」に捕われた謬見である。

笠井潔は、探偵小説は原理的にメタ探偵小説でしかあり得ないと言う。<sup>注20</sup>その議論に深入りする余裕は今の、ないが、「地底獣国」の(メタ)探偵小説性については言及しておく必要がある。論者は本論の「2」で、読者の真偽判定の試みが不可避である旨を述べた。そのように読者が試みることは、結局「犯人探し」でもなく「アリバイ破り」でもなく、「動機探し」ですらなかった。実に、それは、いったい何が起こったのか、という問いに答えようとしたことに他ならないのである。つまり、「地底獣国」は、「事件探し」(あるいは「探偵小説探し」)の探偵小説であると言える。

## 5. 結び並びに展望

前章までに述べたような久生十蘭の方法は、やはり当時の通常の小説作法から大きく逸脱していると考えられる。荒正人、草森紳一らの読み方にも、したがって歴史的なそれなりの理由はあるわけではある。ここでこの逸脱を方法的突出と捉え、そこに同時代の方法的前衛を発見する事が、文学史的に見て生産的であろう。短かく言えば、それは、方法的破壊、過剰による(メタ)小説の構築という方法であり、つまり、十蘭の方法によって横光利一、太宰治ら同時代の方法を照らし返すことが可能になってくると思われるのである。これこそ、今まで十分に評価論述されることのなかった十蘭を再評価し得る最大のポイントであり、巷間言われる十蘭のエスプリ、驚異的知識量、換骨奪胎の手際の鮮かさなどは、もはや論ずるに足りないと言えよう。

十蘭の個人史で言えば、この方法の獲得のために演劇があったはずである。

また、表現自体が魔と見られる「魔都」<sup>注21</sup>や、「湖畔」<sup>注22</sup>等の作品はこの方法と密接な関係を持つてはいるはずであるが、そこまで論じることは本論ではできない。<sup>注23</sup>他日の別稿を期して本論考を了える。

注1 鈴木沙那美「新青年」学事始め1——雑誌「新青年」には問題がいつぱいつまっている(『早稲田文学』82号、昭和58年3月)。

鈴木貞美「新青年」学事始め2——(日本独自の探偵小説)の形成と位置(『早稲田文学』83号、昭和58年4月)など。

注2 雑誌「ユリイカ」は「特集・新青年とその作家たち」(87・9)に続き最近では「特集・久生十蘭——文体のダンディズム——」(89・6)を組むなど特に積極的である。

注3 水谷準(一九〇四年生まれ)。谷譲次(一九〇〇年生まれ、一九三五年没。別名、牧逸馬、林不忘)。共に函館中学に在籍。

注4 三一書房版「久生十蘭全集」第一巻解説。(69・11)

注5 社会思想社刊「地底獣国——久生十蘭傑作選III——」(教養文庫76・7)解説「刻鏤無形」。

注6 引用は三一書房版「久生十蘭全集」第一巻(89・11頁)による。以下、作品本文の引用はこの版により、いちいち注記せず、ページ数のみを示す。

注7 拙論「芥川龍之介「妖婆」の方法——材源とその意味について——」(『国語国文研究』74号、85・9)等を参照された。

注8 詳しくは後述する。荒正人、中野美代子ら。

注9 獐は鹿の一種。朝鮮半島から中国東北部などに生息。シベリアに生息するとの文献は管見に入らず。

注10 もっとも、後述にかかわるが、これでも疑念は残る。この獐は恐竜の支配する獣国を通過してエストル山まで無事にたどりついたのだろうか。

注11 これも後述するが、仮に「一、苔原と沼澤」の語り手が虚言しているとなれば、この物語全体の真偽性が問われ、エストル山の獐の記述も証拠性を失う。

注12 中野美代子、既掲解説。この失敗に懲りたロシア人が、革命の前であると後であるを問わず、日本周辺の海に野望を抱いたのも無理はない。(中略)この小説をその方面から眺めることも可能なのだということだけは、重ねて指摘しておきたいと思う。

注13 既掲解説。

注14 十蘭がこの小説内に仮構した「地球の抜け穴——倫敦までの地底三カ月の旅——」(「二」に「抜粋」が掲げられている)にはヴェルヌ「地底探検」と類似する人名・地名等が見られる。ハンズーガンス、リジンプロックスコイリンデンブロック、など。

注15 ジュール・ヴェルヌ。「地底旅行」(1865)、窪田毅訳、創元推理文庫、68・11。

注16 中野美代子、既掲書。

注17 笠井潔「顕現する象徴とその消滅」(『幻想文学』85年冬号)引用は「物語のウロ」

ボロス——『日本幻想作家論——』(88年5月、筑摩書房刊)による。

注19 草森紳一「地球の抜け穴——久生十蘭『地底獣国』」(『ユリイカ』、'87年9月)。

注20 既掲書。

注21 '37・'10・'38・'10「新青年」

注22 '52・'4「オール読物」

注23 ただ、見取りとして述べれば、十蘭を「意識家」とし、「演技が演技であることを何重の意味にも意識する」演技者として捉える(川村湊「紙の中の殺人」(「89・6」)河出書房新社)だけでは、本論に述べたような想像力それ自体を主人公とするが如き十蘭の作品は論じきれないと思われる。

付記 本論は弘前学院大学における'88年度講義「郷土作家研究」の一部に基いて書かれた。また、弘前学院大学国語国文学会'89年度夏季大会において「久生十蘭の方法——『地底獣国』を中心に——」と題して発表したものと大略を同じくするものであることを申し添える。

(「89・11・2」)